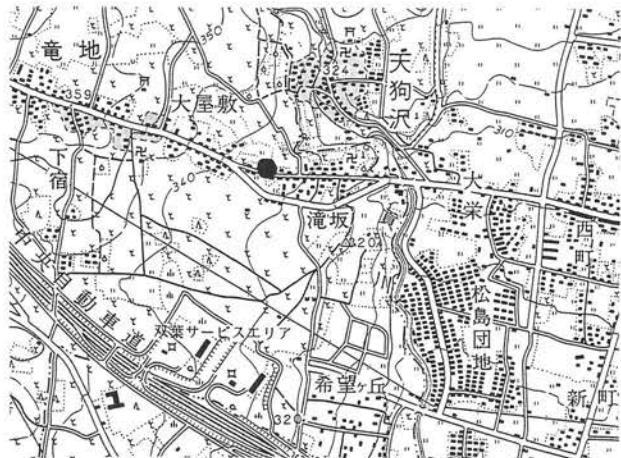


4. 黄梅院跡

所在地 双葉町竜地6287・6288
 調査原因 文化財指定に先立つ確認調査
 調査期間 1996年3月23・25日
 調査面積 1,976㎡
 調査主体 双葉町教育委員会
 担当者 高須秀樹



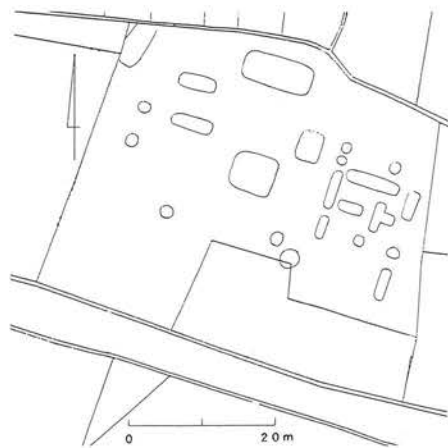
黄梅院尼は武田信玄の娘であるということから、県内をはじめ県外からの問い合わせも多く、町文化財審議会からも町の史跡に指定したいとの意見があり、資料の収集を目的として地中レーダーによる確認調査を実施した。黄梅院は甲府盆地を見下ろす登美台地上の滝坂にあったとされ、現在は3基の五輪塔をはじめ石造物が集められ、その周りは住宅や畑に囲まれている。これらの石像物は黄梅院と直接関係はなく、後にこの付近から集められたものである。

黄梅院尼は武田信玄の長女として天文12年（1543）に生まれ、同23年（1554）に小田原の北条氏康の嫡男氏政に嫁いだ。しかし今川義元の死後、永禄11年（1568）に武田氏・北条氏・今川氏の同盟関係が破れると離別させられ、甲府に戻り出家し黄梅院と号したが、半年後の同12年（1569）6月に亡くなった。その前後に甲府大泉寺の末寺として黄梅院が建立されたと思われるが、黄梅院尼の隠居寺としてなのか、菩提寺として建立されたのかは不明である。その後、明治の廃仏毀釈によって廃寺となった。

地元の人によると、廃寺後の境内は畑や宅地となり、付近から石造物が集められていた。また現在五輪塔が建てられている部分は小高くなっているが、これは隣に防火用水を掘ったときに、その土を盛ったもので、太平洋戦争当時はこの土盛りの下に防空壕を掘ったという。3基の五輪塔は大きさや石材が異なるものが積まれており、「黄梅院跡」としての体裁が整えられてしまった。さらに近くの龍蔵院にある「子安地藏」は、黄梅院の本尊であったという。

黄梅院について『甲斐国誌』には「曹洞宗府中大泉寺ノ末、本尊ハ勝軍地藏。古ハ地藏原ニアリ。校者曰く当院ハ武田信玄ノ息女黄梅院尼（北条氏政室）ノ牌所ナリ」とあるのみで、その他の考古学的・歴史的根拠が乏しく伝承ばかりが先行し、場所についても疑問視され、文化財に指定されるまでには至っていなかった。

明治20年代に作成された分間図には、この場所と隣接する果樹畑は墓地と記されていることから、文化財審議会から文化財に指定したいとの意向があり、詳細な調査を実施することになった。しかし現在は果樹畑のため発掘調査が困難であることから、地中レーダーによる調査を実施した。この結果、建造物の基礎は確認されなかったが、約2m間隔で墓塋と思われるものが確認された。これは分間図と一致したことから、この辺りにあった寺であり、廃寺となった黄梅院の跡という可能性が高くなった。



地中レーダー反応箇所